様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5　月　31　日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520190
研究課題名（和文）大阪の出版文化の研究―大阪著述家書目の作成―

研究課題名（英文）Research of publication culture of Osaka－Making of those who write Osaka catalog of books－

研究代表者　浦西　和彦
（URANISHI KAZUHIKO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：20067672

研究成果の概要（和文）：大阪出身の著述家、大阪で活躍した文学者の著者別の書目である。明治から現代までを取り扱っている。対象とした著述家は、宇田川文海、渡辺霞亭、村上浪六、西村天囚、角田浩々歌客、菊池幽芳、河井酔茗、中村吉蔵、小林天眠、久津見蕨村、木崎好尚、高安月郊、上司小剣、斎藤弔花、薄田泣菫、奥村梅皐、食満南北、今中楓渓、石丸梧平、直木三十五、宇野浩二、渡辺均、北條秀司、長谷川幸延、藤沢桓夫、武田麟太郎、井上友一郎、織田作之助、河野多恵子、谷沢永一、向井敏、開高健の 33 名である。

研究成果の概要（英文）：It is a catalog of books according to the author of a man of letters who was active in the brother of the quill and Osaka from Osaka. The brother of the quills who target it are 33 people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：大阪文学・明治文学・大正文学・昭和文学・現代文学・文芸評論・詩集・文化思想

１．研究開始当初の背景

近代文学年表としては、『現代日本文学大年表明治篇』（昭和 43 年 5 月 5 日発行、明治書院）、『現代日本文学大年表大正篇』（昭和 44 年 1 月 25 日発行、明治書院）『現代日本文学大年表昭和篇Ⅰ』（昭和 46 年 9 月 5 日発行、明治書院）や市古貞次、久保田淳篇『新版日本文学大年表』（平成 14 年 9 月 25 日発行、おうふう）等々がある。しかし、それらは紙幅の都合上、その年月に雑誌に発表された作品、それもごく一部の代表作のみを網羅しているにすぎない。その上、そこでは単行本はほとんど取り上げられない。中央の文壇で華やかに活動した人々だけにスポットラ

イトがあてられ、大阪で文学活動をしてきた人々についてはほとんど取り上げられることがない。近代文学における書目研究については、昭和 12 年 4 月 20 日に発行された『明治文学書目』(村上文庫) がある。それ以後、書誌的研究は進歩したが、なぜか書目作成については全く等閑視されてきて、僅かに浦西和彦の『日本プロレタリア文学書目』(昭和 61 年 3 月 10 日発行、日外アソシエーツ。のち和泉書院の『浦西和彦著述と書誌第 4 巻』に増補) があるだけである。流派別の文学書目、例えば『自然主義文学書目』や『白樺派文学書目』や『新感覚派文学書目』など、作成されたことがない。労の多い仕事に果敢に挑戦して文学書目を作成しようという研究者はいないようだ。実証的文学研究の基盤となる文学書目の作成が全く無視されてきた研究の背景のもとに『大阪文学書目』の作成をすすめたのである。

２．研究の目的

大阪で活躍した著述家や大阪出身の小説家、評論家、歌人らがどのような著書を残しているのか、明治から現代にいたるまでを対象として調査することによって、大阪の出版文化を具体的に解明することを研究目的とした。日本近代文学は東京を中心として発展し、繁栄してきた。明治、大正、昭和の時代において、大阪で生まれた文学者は作家活動を続けていくためには、宇野浩二や開高健などをはじめ、東京へ移住していかねばならなかった。なぜなら近代において、雑誌社や出版社がすべて東京に集中していたからである。わが国の近代文学は二葉亭四迷や坪内逍遥や森鷗外らによって明治二十年頃に確実する。しかし、大阪は他の県と違って、江戸時代の井原西鶴や近松門左衛門らが活躍した上方文化の伝統が遺産として残されていた土地である。事実、明治二十年前後は、東京と並んで独自の出版文化を生み出していたのである。日本近代文学の中心にはならなかったが、大阪では明治二十四年頃、西村天囚らによって浪花文学会が創設され、機関誌「なにはがた」が創刊された。「大阪朝日新聞」や「大阪毎日新聞」が創刊されるのも大阪である。朝日新聞も毎日新聞も全国紙として急成長していく。この「大阪朝日新聞」や「大阪毎日新聞」で宇田川文海や渡辺霞亭など新聞小説を書き、東京の文壇とは別に、大阪独自の文壇を形成していったのである。これまでの文学史や文学研究においては、大阪の文学的活動はほとんど等閑視されてきた。例えば村上浪六などは国民的作家であった吉川英治などに大きな影響を与えたのであるが、村上浪六の文学的研究がほとんどなされないで今日まできた。一体、村上浪六にどのような著書があるのか、その研究の基礎となる書目の書誌的研究がなおざりにされてきたのである。『大阪文学書目』を完成することによって、これまでの東京を中心とする近代文学史や文化史が、また違った視点で見直され、新たな文化遺産を発掘することになり、これからの文学研究に寄与することを目的とした。

３．研究の方法

国立国会図書館といえども、わが国で出版されたすべての著書をことごとく所蔵しているわけではない。特に大阪で活躍し、大阪という地方で出版された書物は公共図書館でも所蔵されていない場合が多い。また特に国立国会図書館では、明治期や大正時代に出版された古い書物については、実物を閲覧できないで、マイクロフィルムで見ることになる。フィルムであれば、厚紙装なのか、布装なのか、あるいは書物の紙型が判明しない。書目の書誌を作成する場合の情報を把握することができないのである。書目作成上の具体的な方法としては、図書館に所蔵されている蔵書だけでは実現しないことを認識した上で、その対策を考えねばならないのである。大学図書館や公共図書館にどういう著書が所蔵されているか、その調査から出発し、さらに図書館などに保存されていないものをどのようにして探索するか。こまめに古書店をまわったり、あるいは全国の古書店が出している通信販売古典や、古書即売会や、あるいはインターネットで探すより他に方法はないのである。この世には研究者たちが知らない書物が多くある。既に判明している本はどうでもいい。書目作成において大事なことは、これまでその著述家のわからない書物を

探し出すことである。私家版で刊行された本もある。戦争や震災で消滅してしまった書物も数多くある。根気を継続して書物の探索にあたるより方法はないのである。書目作成は図書館蔵書目録やパソコン検索できるものではない。一冊一冊の実物を手にとって確認しないことには書誌的記録がとれないのである。あらゆる手立てをつくして書物の探索にあたらねばならないであろう。書目の完成にはながい時間をかけて辛抱強くやっていくより方法はないのである。

４．研究成果

研究成果としては『大阪文学書目』（平成22年8月10日発行、遊文舎）と『谷沢永一博士書目』（平成22年8月10日発行、遊文舎）の2冊を出版することができた。

『大阪文学書目』はＡ５判、二段組、520頁もの大冊である。宇田川文海から開高健まで、その著述家の生年月日順に33名の書目を作成しまとめた。『大阪文学書目』で取り上げた著書は2737冊の多くに及んでいる。その内訳を具体的に著者名と冊数を示すと、次のようである。

宇田川文海　51冊
渡辺霞亭　187冊
村上浪六　219冊
西村天囚　43冊
角田浩々歌客　7冊
菊池幽芳　81冊
河井酔茗　31冊
中村吉蔵　41冊
小林天眠　3冊
久津見蕨村　18冊
木崎好尚　21冊
高安月郊　25冊
上司小剣　43冊
斎藤弔花　27冊
薄田泣菫　50冊
奥村梅皐　10冊
食満南北　17冊
今中楓渓　4冊
石丸梧平　59冊
直木三十五　170冊
宇野浩二　254冊
渡辺均　8冊
北條秀司　66冊
長谷川幸延　54冊
藤沢桓夫　183冊
武田麟太郎　93冊
井上友一郎　124冊
織田作之助　130冊
河野多恵子　76冊
谷沢永一　270冊
向井敏　35冊
開高健　248冊

『大阪文学書目』は取り上げた著書か2737冊という膨大さだけにその特質があるのではない。『大阪文学書目』はその多量の著書を一冊一冊書誌的事項が厳密に記録されているところに、これまでの文学年表などと比較できない書目のよさを如実に示している。『大阪文学書目』の記述を具体的にあげておこう。最初に出てくる宇田川文海の冒頭部分に次のようにある。

春霞築波曙　宇田川文海校閲
一八八一（明治十四）年十二月（日付ナシ）出版　御届十二月　編輯出版人・和田喜三郎　大売捌・岡嶋信七　中本　和装和綴　十三丁　定価記載ナシ
§木版口絵（山崎年信）/序詞/春霞築波曙（第一～五回）

『大阪文学書目』が、単に著書名と出版社と発行年月日だけを羅列したものでないことは、これを見ると一目瞭然であろう。紙型や装幀や頁数や定価などのほか、§印に収録作品名までもが記録されているのである。明治には「発行」ではなく「出版」と奥付にあり、「御届」とか「大売捌」や「木版口絵」など、出版史や印刷史について、現代とちがった歴史的文化というものが見えてくるであろう。日本近代文学研究では夏目漱石とか太宰治とか村上春樹とかの特定の作家研究に一局集中してきた。マイナーな作家たちの存在を研究の上においては全くなおざりにしてきた。『大阪文学書目』では、こういったマイナーな文学者たちを丁寧にあつかい、収録している。例えば、長谷川幸延については『日本近代文学大事典机上版』（昭和59年10月24日発行、講談社）で、真銅元三が長谷川幸延の著書は『冠婚葬祭』『寄席行燈』『殺

陣師段平』の3冊のみである。長谷川幸延は54 冊も著書を出して活躍した作家であるとは、その事典からは読みとることができないであろう。長谷川幸延のような作家においては個人全集など刊行されることがないだけに、こうした『大阪文学書目』のようなものが必要なのである。事典に記されていない食べ物談義などの長谷川幸延の別の活動の一面が見えてくるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計４件）
浦西和彦、関西における近代文学事典の刊行と、今後の展望について、昭和文学研究、査読有、第61集、2010、111-113
浦西和彦、葉山嘉樹著『淫売婦』書き込み本（日本近代文学館所蔵）について、日本近代文学館年誌、査読無、第6号、2010、14 - 23
増田周子、火野葦平自筆日記翻刻（大正九年）、関西大学文学論集、査読無、第60巻1号、2010、87－113
増田周子、火野葦平「白い顔に黒い痣」論、東アジア文化交渉研究、査読無、第4号、2010、21－32
〔学会発表〕（計５件）
浦西和彦、明治文学の特異性、全南大学校日本文化研究所国際学会、2010.9.8、全南大学校日本研究所
浦西和彦、韓国外国語大学校日本研究所国際学会、2010.9.10、韓国外国語大学校日本研究所
浦西和彦、書誌における日本文学研究方法、全南大学校日本文化研究所国際学会、2011.3.16、全南大学校日本研究所
増田周子、火野葦平「赤い国の旅人」の成立、全南大学校日本文化研究所国際学会、2010.9.8、全南大学校日本研究所
増田周子、韓国外国語大学校日本研究所国際学会、2010.9.10、韓国外国語大学校日本研究所
〔図書〕（計４件）
浦西和彦、和泉書院、浦西和彦著述と書誌第1巻　新・日本プロレタリアの研究、2009、529
浦西和彦、和泉書院、浦西和彦著述と書誌第4巻　増補日本プロレタリア文学書目、2009、622
浦西和彦、遊文舎、大阪文芸書目、2010、520
浦西和彦、遊文舎、谷沢永一博士書目、2010、111

６．研究組織
(1)研究代表者
浦西　和彦（URANISHI KAZUHIKO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：20067672
(2)研究分担者
増田　周子（MASUDA CHIKAKO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：30294664
(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：